

深イ～話！

No.81

——みやざき中央新聞「日蓮宗僧侶 瀧本光静 講演会より」より——

ある女性の話です。大きな交通事故に遭って、右腕を切断するほどの大きなケガを負いました。

ドクターは「切らなくてもいい」とも言いました。ただ、腱が切れているので腕は動かず、動かない腕はぶら下がっているとすごく重たいそうなんです。偏頭痛の原因にもなり、体にくっついておかなければいけません。ですから「総合的に判断すると切ったほうがいい」とのことでした。

女性は「このままでも問題ないのなら、とりあえずつけておきます。決心できたら切断をお願いします。」と言いました。もう右腕は動かないと覚悟し、彼女は入院中、どんなことも左手だけでできるよう懸命に練習しました。やがて、「右手が使えなくても全然問題ない」と思えるほどになりました。

数か月後、初めて外出許可が出ました。さて、外出しようと準備したとき、ブラジャーが止められないことに気がきました。なんとか止められたものの、今度は運動靴のひもが結べないことにも気がきました。右手でやっていたことを、代わりに左手でやることはできても、外の世界には両手ですることがいっぱいあったのです。「外に行く準備すら一人できないんだ。」そう思った彼女は、それからすっかり心を閉ざし、ひたすら本を読むだけの生活をするようになりました。

そんな彼女でしたが、ある1冊の本の、ある1行に出合って、また人生が変わりました。そこにはこんなことが書いてありました。

「この本を読んでいるあなたの体のどこかが痛かったり悪かったりしたら、それを恨むのではなく、そうでない場所に感謝してみてもはどうでしょう」と。

彼女が経験した交通事故は、車が大爆発するような事故でした。そのことを思い返しながらか、「あんな大事故だったのに失ったのが右手だけでよかった」という気持ちになれたのです。

「本を読めるのは左手と目が使えるから」「運動靴が履けないと困るのも、履ける足を残してもらっているから」と、物事をだんだん前向きに捉えられるようになりました。

それからとにかく、残ったところに手を当てながら、祈って祈って祈り続けました。

「左手さん、残ってくれてありがとう。心臓さん、止まらないでくれてありがとう。もうちょっとつき合ってね。右腕さん、長い間私の人生を支えてくれてありがとう。ゆっくり休んでね。」と。

そのうちに、右腕の先がわずかに動かせるようになりました。

さらにその後、4年かけて右腕がある程度動かせるようになりました。腱が枝分かれして新しい腱をつくったのです。

実はこれ、私の話です。今、右腕には多少の不自由が残ってはいますが、リハビリでほぼ元に戻りました。人生って、どうやら感謝や心の持ち方が乱れると、必ず補修されるようになってるみたいです。私も事故を起こしたときには、お仕置きされなきゃいけないような生活ぶりでした。事故を起こし、心が折れる気持ちになりましたが、そのことで「感謝」を思い出し、光を見つけました。人生ってそういうふうに行けるんですね。その光を掴めるかどうかは自分次第です。